

ミシガン大学って素晴らしい

菊池昇

University of Michigan, A Splendid Place for Challenge

Noboru Kikuchi

不思議な採用

1817年デトロイト市内に設立され、1837年にアン・アーバーに移転したミシガン大学に赴任することが決まったのは1980年の5月。ミシガン大学は、もともとは私立大学であったが、全米初の州立大学として形を変えて以来、ミシガン州の高等教育機関として同州に求められる人材を育成することを期待された歴史ある中西部の大学へと移行しようとしていた。

テキサスと言う半独立的な南西部の州の大学から、もっと有体に言えば大学ランキングの低い大学からの赴任は、学科内でも論争の的になったらしい。採用が4月の初旬までには決まると言いながら5月の最後の日にまで延び、最終的には学科長に一任といった結果としての採用だったと言う。さらに、「二輪車しか作ることがない奴等が、四輪のしかも乗れんような代物をアメリカに売ろうとしている」国から来て、英語もまともに話せず、「石油を売って成り上がった」州で教育を受けた学生に、少なくとも半分くらいの人たちは採用を諾したわけだから、我ながら不思議な採用だった、と今でも時々思うことがある。長くこの大学で働いて、あの時の決定の意味が少しだけ判ってきたように思う。成り上がってくるものこそ必要、下から這い出てくる元気なエネルギーこそ必要、とされることもあるのだと言うことを。

泥舟に乗り込んだヤング・ターク

1978年からの数年間は、ミシガンを始め、五大湖周辺にある州はフロスト・ベルトと呼ばれ、不況で最大打撃をこうむった時期であった。その間、テキサスは石油成金となったため、大量の労働者や退職者達が暖かい気候と職を求めて、テキサス、

ニューメキシコ、アリゾナなど、サン・ベルト地帯と呼ばれた土地へ大移動していた。その流れとは逆にサン・ベルトからフロスト・ベルトへ移ったのだから、テキサスの仲間も、また受け入れたミシガン大学の人たちも、呆れたらしい。本人には、その大変さがよく分かっていなかったし、単に妻に相談したとき、「テニア（永久就職権と訳されており消防署と郵便局の職員だけにある権利）・トラックの助教授になれるのだから、ミシガンへ行きましょう」と言ってくれた、と思っていたのだが、どうもそうではなかったらしい。彼女は友人達の居るテキサスの方が良かったらしいが、自分の先生のところでシャドー・マンとなり最後には喧嘩別れのようになるくらいなら、素晴らしい大学だった、と興奮して話していた大学へ移ったほうが得策かな、と考えただけだそう。そう言えば、ミシガン最初の日、「ミシガンのキャンパスの何処がいいの。テキサス大学のほうが

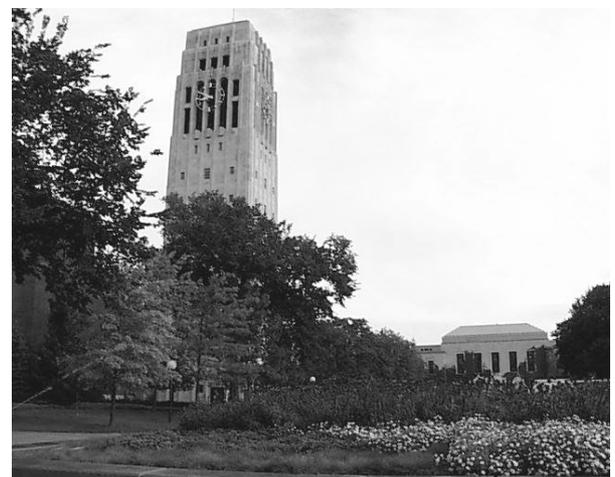


写真1 ベル・タワーとラッカム大学院大学
(セントラル・キャンパス)

美しかったじゃない」と言われた。「でも、テキサスとは違う良いところもあるだろう」と抗弁したものの、テキサスに居たころの半分の大きさにも満たないアパートへ引越さざるをえず、実質給料も20%ダウンの生活に突入してしまった。1万9千2百ドル。税金や諸経費を差し引いた後、手元に残るお金は、毎月1040ドル。部屋代が340ドルで、確かにテキサスに居たときよりも酷い生活。自分でも、何でこんな選択をしたのか、後悔の気分。大学へ行っても自分用のオフィスは無かった。大学院生たちと一緒にの部屋に仮住まいし、二ヵ月後には客員教授たちと一つの部屋を三人でシェアしたものの、教えるはずの有限要素法のコースもなければ、コンピュータの端末も無い。コンピュ



写真2 ウエスト・エンジン・ビルディング
(セントラル・キャンパス)

最上階の4つの窓がある部屋がテモシェンコ教授のオフィスだった。ロシア的な塔の側、個人用の暖炉や書棚まで用意させた大学者だったけど、僕はその半分のオフィスを使うことが出来た。でも暖炉の無いほうだった。そこはダイアゴナルと呼ばれる歩道の上に位置するオフィスで、眺めが良かったし、近くには成績の素晴らしい女子学生たちだけが入れる学内寮もあった。3月の晴れた日には彼女達が惜しげも無く水着姿を太陽の下にさらす中庭があって、僕のオフィスからはすぐ側だった。手前がアグリーと呼ばれた学部生用の図書館で、学生の屯する場所。ウエスト・エンジンの下をく繰り抜けて街に出ると、アイスクリーム屋さんがあって、Rick's Caféも近い。一番思い出のある建物。

ータは、バスで20分もかかるノース・キャンパスにコンピュータ・センターとしてあるらしい。テキサス大学の施設からは考えられないほど何もかもが立ち遅れており、新規採用者用のオフィスもままならないほど。昔の栄光をしょい込んで、プライドだけは一流の学者達の集まりと化してしまっていたとは、節穴の僕には分からなかったのである。なるほど僕でも採用されたわけだ、と妙に納得はしても、こんな恥ずかしいことは妻には言えない。言わなくとも、もう、一目目で分かっていたらしい。引越しするお金が無かったから黙っていただけと言う。名前に負けてしまい、実質的に大きく立ち遅れてしまった泥舟に、僕だけではなく9人ほどの馬鹿なヤング・ターク(おっちょこちょい、気だけは馳せるトルコ移民、と言うような意味らしい)が乗り込んでしまっていた。パークレーから2人(アメリカ人とトルコ移民)、スタンフォードから1人(ギリシャ移民)、と言うように、アメリカ生まれの2人を除いて、世界中から集まってきた移民候補生が7人。さすがにケンブリッジ出身のイギリス人だけは対応が早かった。「こんな大学、いたって無駄」と、デトロイトのエンジン会社と渡り合い、自分の会社を作って独立。今ではディーゼル・エンジンでは世界に知られた会社になっている。ミシガン州立大学(MSU)からのアメリカ人は、ミシガン大学の教授達のいじめで早々にMSUへ帰ってしまい、残ったのは、今更何処へも行けない移民軍団だけ。いや、ジョナサンと言う気だけは優しいアメリカ人が居たんだけど、彼もワシントン州にある明峰マウント・レイニアで遭難死して、6人になってしまった。

実力行使

採用しておきながら、オフィスが無いと言う。名誉教授たちが部屋を明渡さないからだ、と説明されても、やはり不便この上無い。ギリシャ移民は屋根裏部屋を発見し、何で彼がペンキを塗っていたのか、後で分かったのだが、自分で改造して、立派なオフィスに。トルコ移民は物置を整理して一部屋作り、オフィス兼実験室に。極東からの僕は大学院生たちと同居し、テモシェンコ教授

(ASMEでは伝説的な教授でApplied Mechanicsと言う学問を作った人) が使ったと言う伝説的な木製機を探し出し、学生室を不法占拠。学校が何もしてくれないのなら、実力行使。9人とも学生運動をそれぞれの国で、じっくり眺めてきた者たちだから、実力行使はお手の物。オフィスも作れないような執行部、オフィスも無い状態のミシガン大学に、実験道具やコンピュータなどあるはずが無い。予算は全部教授達の給料を上げることに使っていたと言うから、学科運営、学校運営の計画も要領も無かったらしい。えらい学者が沢山居るとどうなるかを目の当たりに見て、僕達ヤング・タークは自衛策を練ることになる。金曜の午後、Happy Hourを設け、助教授達の集まりを結成し、一人でものを言うことを止めようとして取り決めた。そう。一人では弱いだけれど、移民団としての生き残りを考えると、まだマシかなという認識。学生運動に懸命な先輩達は要求しか出せず、いつも無残な敗退だけを味わっていたのだから、僕達は彼らの後を追うのは止めよう。要求とそれを可能にするアイデアまで付けて執行部に提出することにしたのである。これは研究のためのプロポーザルを書く要領と全く同じ。これを研究したいから、これだけの予算を寄越せ、と言っても、もともとないものは出ない。研究者も要求だけし



写真3 法学部の建物
法学部なんて、何処でも物々しい。

か出せないなら無用であるのと同じである。それでも、4年経ち、5年経って見てみたら、ギリシャ、トルコ、日本、それにデンマークと、何やら主流からは大きく外れた移民達4人しかミシガン大学には残っていない、なかでも先進デンマーク、個人の生活まで押しやって働く文化からは程遠く、戦線離脱ののんびり人生。結局3人しか残らなかった。

学者って楽しい職業

大学と言う所の職業も、子供のころ思い浮かべたものとは違っていた。学者って、山のように積まれた本を後ろに、予備のメガネを机の上に置きながら、分厚い本を読んでは、原稿を書く仕事かと思っていた。オフィスを自分で改造したり、物置を実験室に変え、必要な機器を企業から貰ってきたり、買い取る予算を計上しては、その費用を捻出しながら、自分の意志で発案し、自分の責任で全てのことを執り行う職業だとは想像もしていなかった。そして、授業。下手な素人ロックバンドの演奏で騒々しいCafé (Rick's American Caféと言う) で僕が論文を書いていると、それを発見した学部の学生達が自然とRick'sに集まり、宿題解



写真4 大学学長邸宅

学長になるのも大変。なってしまったら学内のこのマンションに住まなければならないし、邸宅前の法学部の学生寮と、その向かいにある女子寮を、毎晩毎晩監視していなければならないのだから、大変。誰もなりたがらないのも不思議でない。

きの溜まり場になってしまった。僕達が余りにもうるさいと、Caféのマネージャが追い出しにかかるので、そのときはしょうがなく深夜の教室に戻って補講。大体が夜遅くCaféに来てロックを聴くなんてのは出来の悪い学生達に決まっている。そいつらに捕まって、教室へ戻っての講義なのだから、途中からロックやジャズの話になってしまうことも頻繁だ。それでも、昼間の授業よりは楽しかった。学者って、寝る時間の少ない職業だって言うことも、あの時に分かった。そして、学者の妻なんか、いつ帰ってくるかも分からない連れ合いと一緒にいるのだから、悪妻か、初めから何も期待しない諦めの人か、ま、常識をわきまえていたら成りたない。いつ出て行かれても文句は言えない、と覚悟したのもミシガンへ行ってから。何か研究に関しての考え事が始まると、何を言われても何を聞かれても「うん」としか返事しなくなるのだから、妻も子供もやってられないだろう。確かに学者の子供の出来が悪いと言うのも納得がいく。何を聞かれても、何を頼まれても、考えるモードに入ったら最後、この世に戻ることは無いのだから、子供も可哀想だ。他所さまの子供達だけではなく、自分の子供にもちゃんと教えてよ、と言われても、そんな器用なことは出来っこない。



写真5 エンゼル・ホール

自然科学と哲学科のある建物。サイエンスは建物からしてやはり素晴らしい。この原型が州政府のキャピトルだったと言うから、ここが大学本部のようなものだろう。

ま、Rick'sに来たら別だけど…。少なくともミシガン大学は、こうした学者としては当たり前の考え方を学ばせてくれた最高の場所だったとは思わけれど、やはり、少しは学者気取りもしてみたかった。と言うわけで、僕はテモシェンコ教授の机を愛用し、彼が使っていたと言うオフィスの半分を頂き、研究を三年させてもらった。娘達に言わせると、ただの古ぼけた汚い机で、お父さん嬉しそうに勉強していたよ、と言うことになるらしい。そうした学者気取りも、工学部を再生するためにノース・キャンパスへの引越しが決まってしまう、あえなく霧散。学者気取りって、はかないねえなんて言いながら、まだあの頃と同じ気分で大学にいるのだから、学者って、本人には楽しい職業なのかもしれない。妻と子供達、そして周りの人たちは多大な迷惑を蒙るのだけれど。

希望と楽観

そう、このような調子で20年近く、僕たちは希望と楽観だけを頼りに走りつづけている。それは、ジム・ドゥーダシュタットとチャック・ベストと言う素晴らしい指導者に恵まれたからでもある。彼らが工学部長と副部長になったのは1983年で、ジムが38歳、チャックが39歳のときであった。ジムは4年後にはミシガン大学の学長として10年間、最後には働きすぎで精神状態に不調を来すまで大学の有るべき姿を追求。チャックは大学教育に関しての明晰な展望を請われてMITの学長へと転身。全米大学ランキングで一時は14位にまで落ち込んだ工学部を3位にまで回復させ、若い僕たちに自らの意志で自らの夢を実現する為に走るの苦痛ではないし、少しは過剰にならないと何事も為し得ないと教えてくれた。そして今、次の新しい世紀へ向かって新しい大学を創り出そうと走る事を止めない。誰かがやってくれるのを待つよりも、自分達で追い求め獲得していくほうが楽しいだろう、とニッコリと微笑むジムやチャックに僕たちは騙されたのだろうか…。ミシガンって僕には魅力的だった。(1999年8月18日原稿受付)

事務局付記：執筆者のミシガン大学菊池昇教授は1999年4月から12月まで、客員研究員として当所に滞在されました。